

中村素堂

雪のシーズンになると、いつも思い出すのは、深い積雪を強力に撥ねあげて、列車のために跡をあけてくれるラッセルのことである。

今、全日本の豪雪地帯で使われているあのラッセル機関車は、羽島式といふべきものだ。国鉄の刊行書物に載っていた。むかしカナダに赴任して除雪車の研究をして帰った羽島金三郎翁が、帰朝後日本の風土に適うように設計したものが、今日使われているものの原型だといふ。

これは発明の当時、国家からあつく表彰されたことはもちろんであるが半世紀以上の年月を経た今日、このことを記憶している人は、国鉄職員にもあるかなしかであろう。

そういう自分もそんなことは全く知らなかった方の仲間だったのだが太平洋戦争の災火にやられて、家族を五年も地方に置いてひとり東京に勤めていた時、知人の世話で下宿していたのがなんとこの羽島翁の二階であった。

二十数年も前のことだが翁はもう八十に近かったと思う。全く世間のことを離れたにちかい生活で東大在学時の同期会とか何かの顧問としてたまに外出するくらいのものであった。

君が自分の安住の家を作るまで何年でも遠慮なくおつてくれ——という温い言葉に甘えて、五年という長い間借りを許していただけた間に、これは是非人に、話しておきたいと思うような翁の生活を見てひそかに鞭撻を蒙ったことも大変なものである。

庭木の手入れをしてはしごから墜ち、寝ていた翁を下の室に見舞った時、天井から吊られている電灯の傘が紙製の珍しいものだった。

たので、これはどこかで買ったものかこの産かなど、座談のつなぎにたずねたのがいけなかった。

これはネ、僕がスイスの登山鉄道に乗った時、終点の駅の待合室にあったものを譲り受けてきたんだ。というのは、どうもこれは日本製だと直感して懐かしさもあつたからだ。だが帰って日本で調べてみたが、一向にその産地が判らない。いまだに手がかりがない——と翁はいう。それが帰朝後四十数年もたっている昭和二十二、三年の秋のある日の話だった。

君ひとつ調べてみてくれんかね——とこじれ、行きがかり上断りもできず一年半もかかって、とうとうそれが島根県の産だと判明し、すばらしく翁を満足させることができた。

これには大変な手数がかったのを、翁の家族はとても気の毒がって、いい加減にしておきなさいとか、何でもたしかめなければ気のすまない人だからあんなお話は絶対にしないようにとか、親切に注意をいただいたりしたことも一再でなかった。

読書ついでに夜ふかしをする癖で、夜半も一時だの二時だのになつて、ソツと足音をしのばせて階下の手洗いへ下りると、離れた一室にやはり灯りが点いている。失礼だが通りしなにそつと見ると、翁は端然と座つてやはり大部な書籍を読みふけていた。

いわゆる世間でいうご隠居さんの生活であつて、これからその知識を何の役にたてようというのでもない人が、なおかつ一点の不明をもゆるさない真摯な態度を持つて余暇さえあれば何か研究しているのを見て、ひそかに恥じ、また言葉ではない実践であるからの故に、きびしい励ましをいただいた記憶はいまも有り難いものだと感謝しているのである。

〈旺美〉昭和四十三年